

# 蝶彦雪磨播

山 本 広 一

飾磨郡鹿谷村の北端に近く聳える雪彦山は高さ867m、主峯を三ツ辻山(海拔915m)といい、日本新百景中に選ばれた県下の名勝である。山はモミ・スギの溪谷美よりは、むしろ直下300米に及ぶ豪壮な洞ヶ岳の大岩壁によつて名高く、古くは修験者の道場として神聖視された所である。現在では岩登りの壮快味やキャンプの遊びをもとめて訪ねる者が年々増加し、観光の諸施設も次第に整えられてきた。

かねて私は植物の豊富な雪彦の昆虫に対して、大きな興味と期待を寄せていたのであるが、昨年(1952)10余年振りに訪れて、余りにも変り果てた山の姿に、暫し驚歎せずには居られなかつた。圉敗れて山河荒廃たり、とでもいおうか、鬱蒼と繁茂していた往時の老樹や大木は、今や殆んどが伐採せられ、山膚は透け、全く裸と化した所さえある。

私はここに戦前の山の姿を追憶して、曾てこの地に於て獲た蝶を中心に、簡単な案内記を綴つてみようと思ふ。

雪彦山は姫路市の北方約30kmの所にあり山麓に建つ鹿野神社のすぐ前までバスが通じている。然し、蝶を目的とする者には、途中の寺河内辺より、流れに沿つて約2軒の坂根の谷を遡るがよい。夢前川の水源をなす谷川の両側には、美しい杉の木立が続き、その下蔭や水際には到る所にシャガが群がり、開花の頃けとても美しい。5月中旬この附近に多数のウスバシロチョウが発生し、樹間を行く種々のアゲハチョウの姿が見られる。下旬からは普通のイチモンジに混じてアサマイチモンジが現われ、コムスジが特異の舞い振りを見せている。

神社の横を過ぎると貯木場があり、洞ヶ岳の裏手の谷へ木馬路を通じている。この辺りには、早春美しいサカハチチョウの春型ヤツマキチョウが出現し、5月の半ば頃よりクロアゲハ・カラスアゲハ・オナガアゲハが盛んに往来しはじめる。殊にオナガアゲハの数は夥しい。本年5月観光客を誘致する目的に養魚するのだろうか、貯木場に接して低まつた場所に、コンクリート造りの大きな水溜が工事され、溪流を導くよう計画されていたが、このあたりには湿りを求めてセセリチョウやアゲハの仲間が集つてくる。溪谷の蝶道にアゲハを待ち伏せて、次々と能率をあげていくのも愉快である。夏季にはかなりのモンキアゲハが現われ、時にはミヤマカラスアゲハの姿を見かける。

橋を渡ると左に杉林があり、使い捨てた空罐や紙箱が前年の賑わつたキャンプの名残を留めている。この辺には秋の頃よくアサギマダラを見受けることがあるが、一般には平凡なジャノメやヒカゲ類が飛んでいるにすぎない。

木馬路に従つて、橋から凡そ150m許り登ると、洞ヶ岳への所謂雪彦登山路が左方に岐れる。昨年ここに流れに臨んで数軒のバンガローの施設が出来、'花の家'などと風雅な表札が掲げられているが、前の流れには時折可憐なワカガラスやキセキレイが現われて更に趣を添える。路は次第に急坂となり、全くの丸坊主となつた所もあり、蝶は甚だ貧弱である。それでも谷間にウツギの花の咲く頃には、アオバセセリ・ダイミヨウセセリ・コツバメ・トラフジミ・ウラギンシジミ・ヒヨウモンの類が訪れ、時には美しいトラガが見られる。

やがて路は大きな岩のある所に出る。私がゼフィルスと取組んで頑張つた所だけに印象の深い所だが、当時の木立等勿論ない。折々ルリタテハ・アカタテハ・スミナガシやテングテウが路上に飛び立つ位で、殆んどがヒカゲテウ・クロヒカゲ・ヒメジャノメ・コジャノメ・ヒメウラナミジャノメである。路に溢れ出た水溜りにアオスジアゲハ・カラスアゲハ・キテウ等が集つて渴を癒している。

中腹で左折し、緩かな路を進むと間もなく紅葉橋に出る。深い溪谷に架したこの橋は、中々見事なもので、見下せば、谷底に働く樵夫の影が小さく動いている。1935年私はここでメスアカミドリシジミの珍種を見つけた。その後も度々訪れたので、この附近は相当詳しく承知している筈である。橋の模様はその頃と甚だしく違つて見えるのは、林道の変更によつて架けかえられたためなのか、それとも周りの激しい変化から起る錯覚に因るのだろうか。当時は橋の向うに笹の深い茂みがあり、そこから路が渡れていたため、勝手に知れぬ心細さに引返したこともある。現在ではちよつと見当がつかない。左に望む洞ヶ岳の岩壁だけが昔のままの姿にそぼだつている。

頂近い谷奥に小屋があり、椎茸を栽培している由。伐開かれた跡に咲き出した花には、キアゲハ・スジグロテウ・アカタテハ・ヒメアカタテハ・ルリタテハ・サカハチチョウやヒヨウモンが訪れ、時には何処よりもなくアサギマダラが舞い下りてくる。

どこかで斧音が響いている。どこまで伐採が続けられるのだろうか。“山高きを以つて貴しとせず”とか、次第に森林美の失われていく雪彦を惜しまずには居られない。

雪彦山の蝶に就ては、調査が未だ充分でないので、詳細な目録は何れ後日に待つこととし、茲には二、三種類について多少の説明を加えてみようとする。

1. ウスパシロチョウ *Parnassius glacialis* BUTLER, 1866

5月中旬より坂根の谷に出現し、賀野神社附近の山麓に最も多い。私はこの辺に食草もあり、蝶の発生しそうな場所なので、一度適当な期に探してみようと思っていた。ところが最近加古川中学の田口勝夫教官が完全な3頭の雌を得た(5月25日)ことを知って、本年5月17日山を訪れた。幸に天気は好く、蝶もかなり飛んでおり、20頭許採集したが、その中にはかなり汚損した個体が含まれていた。次で24日には更に多数のものを認めたが、雌の完全品は極めて少なく、雌さえも相当に傷んでいた。これらの点から察すると、この地方での発生期は大体5月12~3日頃より下旬に及び、年によつて6月上旬頃まで見られるのではないかと思う。

私は本種を宍粟郡三方村(1940)や佐用郡西庄村(1952)にて採集したことがあり、中央の山地帯には広く分布することゝ思うが、現在私の知る範囲に於ては、この辺がその南限となつている。

2. ミヤマカラスアゲハ *Papilio maackii satakei* MATSUMURA, 1919

1953年5月17日の午後2時過ぎ、溪流を遡つて行く1頭と、更に10分許経て逆の下つてくる1頭とを目撃した。或は同じ個体であつたかも知れないが、何れも私のいる数mの前方を過ぎて行つたので、後翅の裏面に完全な黄白の孤状帯の存することや、前翅裏面の外縁に近い淡色帯がカラスアゲハの場合と余程趣の異つていることが認められた。蝶が谷を下つて来た時、私は確実な一擲を浴びせたのだが、蝶にのみ気を奪われて、網が十分にさばけず、逃してしまつた。余りにも残念なので24日にも重ねて訪ねたが、この度は全体にアゲハ類は減少しており、本種は遂に目撃することが出来なかつた。個体の極めて稀なためであろうが、将来必ず採集出来ることを信じていたところ、過日前記田口教官が往年の8月、幕営中に1頭を採集していることが判り、明らかに産することの実証されたことを嬉しく思う。

本種はアゲハ属中最も山地性を帯び、高緯度の地に産するもので、本県では但馬方面、殊に氷ノ山附近に

少なくない。しかし播磨方面にあつては極めて珍らしく、私が宍粟郡奥谷村にて採集し、その後西村公夫氏によつて神崎郡長谷村が記録された他は、多くを知らない。今後も但馬境に近い山地より次第に報告されることゝ思うが、余程南に離れたこの山に採集されたことは愉快である。本種もまたこの附近が本県に於ける分布の最南端であろうと考えられる。

3. モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* BUTLER, 1881

播磨地方にあつては諸所より報告されているが、何れも個体数は少なく、珍しい種類である。小林平一氏よりの通信によれば、氏は本年8月15日登山して、かなりの数を目撃されたらしく、3頭を採集されている。私も貯木場近くで屢々見かけたことがあり、播磨方面に於ける多産地といえよう。

4. メスアカミドリシジミ

*Neozephyrus smaragdinus* (BREMER, 1864)

1935年7月私は紅葉橋附近で1頭の雌を採集した。今では神崎郡の北部からも報告されているが、当時にあつては本県よりの記録はなく、従つて本県産第1号標本として喜んだものである。その後も特に本種を指して度々登つたが、第2号は終に得られずに終つた。

標本は前翅に大きな橙色紋があり、美しい個体である。尙、当時の記録によれば、

“1935年7月12日 晴

(略) ゼフィルスの採集には多少時期遅れの感はあるが、路傍の潤葉樹の枝を蔽きながら林道を登る。大岩の辺まで来ると、樹間から飛び立つた蝶の翅が太陽に照らされて美しい緑色にきらめく。種々苦心したが、何としても足許が危く深くへは踏みこめない。遂にあきらめて前に進む。確かに5~6頭は居た。枝が高いのが残念である。(略)

海拔凡そ650m、絶壁に架け渡した見事な橋がある(註・紅葉橋。)屢も過ぎたので橋板の上に腰を下ろして弁当を開く。絶えず周囲に気を配つていたので、食事といつても食塊が機械的に手と舌との助けによつて、胃袋に詰め込まれているというに過ぎない。折しも橋の袂から絶壁に枝を張出した一本の老樹(註・モミジだつたかサクラだつたか)の梢をシジミが2頭舞つている。早速弁当を橋の上に抛り出し、継竿して(註・私は長い鯉釣用竿を使用していた)一気に擲りに、うまく1頭が捕れた。メスアカミドリシジミの雌である。本県で採集された例を開かぬものだけに、本日の収穫はとてすばらしい。登つて来る途中で見たゼフィルスも本種だつたか知れない。もしそうだつたとすれば、この山には (p. 215 へ)

を帯びたる地域の樹木を擅に伐採し去りて学問上国宝的なる品種をむざむざ滅亡せしむることにあまりにも無關心なる方面に対し、其反省を促すべく警告を發し、以て公園愛護の輿論を喚起せしめんとの念願から斯くも大声を疾呼したる次第である。それで茲に筆を擱くに当り極めて最近に其实証を握りたる稀品消失の一事例を提供して本稿の結びの糸としたい。洲本税務署裏手よりの登山口坂路にかかる地点の左手路傍に孤立していたタカトウダイ科アカマガシワの樹皮に点々緑褐色の斑紋を以て着生していた地衣類で発見当時ヒメチャガマゴケなる和名を与えられた一新種は目通り径5寸以上もあつた前述寄主の一幹が、既に野荒し誰氏かの捺刀の危にかかつていたので、四近には最早該地衣の片鱗だにも残されていなかつたことは勿論である。されば彼れにとりて広い世界に唯一樹をのみと云う果敢ない手縁は茲に見事に覆えされ日本三熊山下の一角に主客相擁して哀れ其運命を共にしたと云う

### 丹波植物三珍品

この度丹波の三珍品を選定いたしましたので御紹介いたします。

1. ホシゴウソウ *Sciaphila japonica* Makino 明治35年牧野先生が伊勢本郷の植物に命名なさつた事は有名です。丹波多紀郡福住村の杉林の中に毎年夏期群生するもので、5 cm 程の紫色、無葉の多年生の腐生植物です。
2. キョズミウツボ *Phacellanthus tubiflorus* Sieb. et Zucc. 昨年7月3日多紀郡城南村の檜林の中で採集しました。無葉の黄白色の活物寄生植物で15cm 内外で群生す。寄主はアオキか不明ですがギンリョウソウに近いものです。
3. トケンラン *Cremastra unguiculata* Finet. 多紀郡大宇村の杜叢の中にありサイハイランに似ているが花卉に杜鵑の斑点がある。北地に産するようです。以上 (樋口繁一)

(p. 227 から)

かなり産する筈である。(略)

5. アサギマダラ *Caduga tytia nipponica*

MOORE, 1883

秋の頃山麓や登山路でよく見かける。独特な飛び方で針葉樹林の間を行く姿は優しく美しい。緩慢だが危険を感じると、急に高く舞い昇つて、とても捕えられない。曾て小林平一氏は10分間に約25頭を見たと言われたが、確かにこの山には多いようである。

(1953, 8, 20)

悲劇物に終つた訳である。呵々。1945, 12, 15.

(室井云) 松沢先生は去る昭和24年7月16日、74才の御高令で洲本市で亡くられました。翌年の秋に洲本中学(現洲本高校)の卒業生を中心に故先生の最もゆかりの深い三熊山の中腹に遺徳をたたえて記念碑が建ちました。

碑文には

表 松沢重太郎先生碑

先生は三熊山を好愛して一木一石を明にし特に草本菌苔に新種多敷を発見して学界へ贈り国立公園編入の素任を樹てた。この山の知名になつたのは景観美にも増して植物の宝庫として知られたためである。昭和25年秋彼岸先生の遺徳を慕う人々によりこの碑が出来た

裏 昭和二十四年七月十六日没

享年七十四

### 新刊紹介 學校園の經營と校外指導

B 6版 224頁、写真、図版80葉、中教出版發行  
定価240円(〒24円)

室井 紳、岡村はた共著

本書は児童、生徒に直接、接しながら、科学教育のために鋭い観察眼を働かせている著者が、現実に動いている生活現象や、其の他の自然現象を対象とする理科教育にとって主要な場である學校園及び校外指導について指導者側の立場から、その經營の方法や、四季の条件を含めての動、植物の観察のしかたや、習性を知る実験方法等に関し、指導上の諸注意を手近な生物を例にとつて説いたものであります。特に、精密なしかも要領をえた挿図と、その説明とは本書の最も特色とする所であり、豊富な経験を積まれた著者にして始めてなし得る所と信じます。今後、本書が理科教育担当者に多大の便宜を与え且つ自然観察を通して理解をすすめてゆく現時の理科教育に対し、充分その役割を果すものと信じ且つ期待しております。

#### 主な内容

1. 學校園  
學校園の目的、學校園の植物、學校園の動物、學校園に飼育栽培しない方がよいもの。
2. 自然観察を中心とした校外指導  
校外指導のあり方、郷土の自然観察表をつくる、校外指導の準備、校外指導の教具、指導者のための自然観察の要点。
3. 子どもに親しまれる遊び  
玩具になる生物、子どもの親しむ植物(笛つくり、水車遊び、ノビルの車、花かご、シャボン玉のつくれる草木、各季節に山野で生食できる果実等60余種)、子どもの親しむ動物(飛行機手ミズムシ、背泳するコマツモムシ、その他)

神戸大学・理学部教授 広瀬弘幸